

古今の経営とITの未来



⑬



「原点である近江商人の理念を大切にしている。」と話す
西沢代表取締役社長 西沢大佐世保校(山下哲嗣撮影)

西沢本店代表取締役社長

にしぎわ まきゆき 西沢 雅幸氏(69)

天保元年(1830年)に滋賀県の近江で特産品の麻織物の卸業をしていたのが当社の原点だ。旧日本海軍が佐世保鎮守府を設置したことを機に、1903年に佐世保に移り、呉服店を開業した。

呉服店は佐世保の発展とともに成長し、中心商店街の振興にも寄与した。しかし、戦火で店舗が消失し、一時休業する厳しい時代もあった。戦後に父が新しい店舗を構えて

近江商人の理念大切に

営業を再開した。現在はファッションや宝飾品をメインとする小売業のほか、不動産開発やクレジットカードなど多角的な事業を展開し、佐世保での開業から115周年を迎えた。

近江出身の商人は、商社の

伊藤忠商事など日本を代表する立派な企業をつくった。私たちは原点の近江商人が商売の理念とした「三方よし」、つまり、「売り手よし、買い手よし、世間よし」の心を大切に、地域の皆さまに愛される店づくりを目指している。

良品を売り、適正な利益を得つつも、お客さまに不利益があつてはならない。お客さまを第一に考えた商売で信用を重ね、社会に貢献する近江商人の心得は、今の時代も十分通用する。

私は40代半ばで、京セラ名誉会長の稲盛和夫さんが中小企業の経営者を育てるためにつくった「盛和塾」に入り、経営哲学を学んだ。その一つに「人生の方程式」がある。人生や仕事の結果は、「考え方」と「熱意」と「能力」を掛け算して生まれると知った。特に熱意は自分で決めることができる。能力は天性だけでなく、努力で磨くことができる。運命は自らの心の在り方で変わる。

今の子供は生まれたときからインターネットが存在する世界にいる。ITの時代となり、人工知能(AI)の普及で生産性が上がり、世の中は便利になるだろう。しかし、環境の変化に乗り遅れると逆になんがAIに使われてしまう。こうした最先端技術への理解を深め、地域経済の活性化につなげるため、昨年6月に地元企業で「西九州インターネット研究会」を設立した。私は代表を務めており、研究会などを通じITの活用を模索している。

ITの分野は米国のシリコンバレーや中国の広東省深圳、イスラエルが先行している。今や東京よりも多くの情報をもち、その差は大きくなっている。世界の動きに関心を持ちながら学び続けることが大切だと考えている。(田下寛明) 次回(2月5日)に掲載します